

月間入院，リウマチ熱を疑われた。右 CAG で主幹動脈は明瞭に造影されたが中大脳動脈 M1 部は不明瞭であった。

現病歴：1986年2月起床時より2日間の左手しびれ感と左半身軽度脱力を認めた。3月10日初診，神経学的に異常なし。CT で左中頭蓋窩にくも膜嚢胞がみられ，右 CAG では M1 部は見えず，基底核近傍に広がるモヤモヤ様血管網を認めた。M2 部より末梢は正常であった。

結語：本例は23年前にモヤモヤ様血管網が存在し，基底核部の虚血症状として不随意運動が出現したと考えられた。いわゆるモヤモヤ病とは異なり血管写しは経時的進行性変化に乏しいと考えられた。

A-68) 一過性脳虚血発作(TIA)の脳循環動態についての検討

桜木 貢・山内 亨
黒田 敏・本宮 峯生 (北海道脳神経外科)
中川 端午・三森 研自 (記念病院)
都留美都雄

一過性脳虚血発作(TIA)の病態生理に関しては未だ解明されていない。今回私共は，SPECT にて TIA の脳循環動態を検討したので報告する。

対象は TIA 23症例(男性17例，女性6例)平均年齢63.1才，方法は島津製 Headtome にて ^{133}Xe 吸入法にて測定した。安静時は23症例，Acetazolamide 負荷は10症例に行なった。

安静時 mean CBF では，正常9例，軽度低下9例，低下5例でした。安静時と Acetazolamide 負荷を行なった10症例では，次の4つのパターンが見られた。CBF 正常で Acetazolamide 反応良好1例，CBF 低下で Acetazolamide 反応良好4例，CBF 正常で Acetazolamide 反応低下2例，CBF 低下で Acetazolamide 反応低下3例。CBF 低下で Acetazolamide 反応低下3例。これらについて， ^{123}I -IMP 施行例とも比較検討し，TIA の脳循環動態について報告する。

A-69) 脳梗塞に persistent primitive proatlantal intersegmental artery を合併した1例

石黒 雅敬・堀田晴比古 (市立札幌病院)
北見 公一・土田 博美 (脳神経外科)
相馬 勤

Persistent primitive proatlantal intersegmental artery (以下 PPPIA と略す) は内頸動脈-椎骨動脈吻合遺残血管の1つであるが，その報告は極めて稀で現在まで20数例を見るに過ぎない。これらの多くは脳血管撮影の際，

偶然発見されているが，脳動脈瘤，脳動脈奇形などの血管奇形に合併する例も報告されている。

我々は65才男性で右片麻痺と軽度の言語障害で発症した脳梗塞症例で，PPPIA を合併した症例を経験した。PPPIA と脳虚血との関連については，文献上古くからその可能性について論じられていたが未だその報告例は少ない。本症例の血管撮影所見，SPECT の詳細を呈示し，PPPIA と脳虚血との関連について若干の考察を加える。

A-70) 脳梗塞超急性期 CT 所見の検討

板本 孝治・上野 一義 (国立療養所)
加藤 正仁・佐久間司郎 (北海道第一病
高橋 明弘・遠山 義浩 (院脳神経外科))

脳梗塞に於ける CT 所見はよく知られているところだが，発症6時間以内の超急性期に於ける CT 所見について検討した報告は少なく，一般的には，脳梗塞に於ける異常 CT 所見の検出は速いもので8時間目位からで，24時間以内での検出率は50~70%とされている。今回我々は，過去4年間に当科に入院した脳梗塞症例のうち，発症24時間以内に搬入され CT を施行した112例について臨床的検討を加え，若干の知見を得た。これに文献的考察を加え報告する。

使用 CT は TOHSHIBA 製 TCT70-A で，単一機種とした。対象は，昭和61年4月から平成元年4月までに入院した脳梗塞症例のうち，上記112例で，天幕上梗塞例に限定した。さらにこれを，発症から6時間以上で12時間以内に施行されたもの，12時間以上で24時間以内に施行されたものに分け，それぞれ異常 CT 所見の有無，臨床的意義を検討した。

A-71) 脳虚血急性期の SEP (DEE)

一急性期血行再建への挑戦一

小林 延光・上山 博康 (北海道大学)
阿部 弘 (脳神経外科)
小岩 光行・柏葉 武 (柏葉脳神経外科病院)

脳虚血急性期の脳機能の回復性を検討するため急性期に SEP (DEE) を行い予後と対比した。方法：対象は入院時発症後早期で脳虚血症状を有し，CT 上低吸収域のみられなかった56例である。全例に急性期に SEP を行い，異常例に dopamine による昇圧下に SEP (DEE) を施行した。DEE (+) で脳主幹動脈閉塞を有する例には急性期に bypass 手術，他のものには dopamine

による hemodynamic therapy を行った。結果：SEP 正常（I 群）12例，DEE（+）（II 群）16例，DEE（-）（III 群）30例であった。III 群中27例は，広範な梗塞巣が出現し，major stroke となったが，II 群では良好な機能回復がみられた。bypass は5例におこなわれ，2例が著明改善，他の3例は内包の限局性の梗塞等のため麻痺の改善が得られなかったが，広範囲梗塞をきたした例はない。結論：DEE（+）例には hemodynamic therapy が有効であり，急性期手術も考慮されるべきである。

A-72) Progressing stroke 急性増悪期の緊急 STA-MCA anastomosis

渡辺 孝男・蘇 慶展 (米沢市立病院 脳神経外科)

STA-MCA anastomosis の手術適応に関しては，まだ議論が多く確定をみていない。我々は Progressing Stroke の急性増悪期に緊急 STA-MCA anastomosis を行い，まだ4症例と経験数は少ないが，有効との感触を得ている。今回は4症例を提示し，その病態，術後経過の特徴などにつき検討を行った。〈結果〉1) 4症例とも男性，年齢は60～76才。2) 責任病変は左内頸動脈または中大脳動脈の閉塞。3) 急性増悪期の症状は重度の右片麻痺と失語症，軽度の意識障害。4) 現病歴と手術時期。2症例では TIA, RIND あるいは minor stroke が半年以上前から出現し，投薬にて経過をみていたが，急性増悪症状が発現したため手術施行，24時間以内に血管吻合を完了した。他の2症例では，軽い症状で発症し，一時症状が安定あるいは軽快したが，24時間以内に再び症状増悪を来したため手術施行，急性増悪後12時間以内に血管吻合を完了した。

A-73) 急性期脳塞栓症に対する Embolectomy の経験から

畑中 光昭 (十和田市立中央病院 脳神経外科)

目的：Embolectomy は血流再建の目的として STA-MCA anastomosis に比しても優る方法として積極的に行なう方が増えたが，問題も指摘される。脳塞栓，超早期例8例に Embolectomy を行なってきたが，少ない経験からの問題点を述べたい。方法，中大脳動脈 (M₁) 閉塞6例，内頸動脈閉塞 (C1～2) 2例に対し，6時間以内に Embolectomy，また1例は Embolectomy+STA-MCA anastomosis 施行。問題例 1) M₂ の再閉塞1例，2) 出血性梗塞2例，3) 穿通動脈領域の血流不

全4例，あった。結果，結論：1) M₁ 閉塞例で Embolectomy 完行したが，分枝直後の一枝に Atheroma による狭窄ありこの部分で閉塞した例は対策として，STA-MCA anastomosis の併用が有効。2) 出血性梗塞は2例とも5日以内に発作的血圧上昇 (200mmHg 以上) した例で，術後の血圧調節が大切。3) 4例の穿通枝領域の CT での LD は穿通枝に対する本法の限界かもしれないが，線溶療法との併用，manupulation のくふうを要すると思われた。

A-74) 脳主幹動脈閉塞症例に対するウロキナーゼ動注療法

柏原 茂樹・竹田 正之 (砂川市立病院 脳神経外科)
高山 宏・本田 修 (脳神経外科)
高村 幸夫 (札幌東徳州会病院 脳神経外科)

急性期頭蓋内主幹動脈閉塞症例に対するウロキナーゼ (UK) 動注療法の報告は散見されるが，その適応や治療成績に対し明確な評価が得られていない。しかし著効例が存在し，また手術による血行再建術や UK の静注療法よりも早く血流再開出来る可能性のある動注療法は，今後適応症例・投与方法等を明確に出来れば，閉塞性脳血管障害に対する有効な治療法の一つとして評価される可能性があると考えられる。そこで当施設での自験例10例を中心に適応，投与方法について文献的考察を加え報告する。対象は内頸動脈閉塞3例，中大脳動脈閉塞5例，脳底動脈閉塞2例の計10例で，UK を12万単位から120万単位動注した。このうち7例に血管写上で再開通と神経症状の改善を認め，2例に出血性梗塞，脳浮腫の増強を認めた。改善を認めた7例のうち半数以上は発症後3時間以内に動注を開始し得た症例で，時間的要因は重要と思われた。

A-75) 慢性期脳虚血症例における脳血流不全の診断 ¹³³Xe SPECT-Diamox test の有用性について

山内 亨・黒田 敏 (北海道脳神経外科 記念病院)
三森 研吾 (脳神経外科)
瀧川 修吾・上山 博康 (北海道大学 脳神経外科)
阿部 弘

(目的) 今回，我々は種々の血行再建術前後の脳循環動態の変化について検討し，Diamox test の有用性を検討したので報告する。(方法) 対象は，TIA から minor completed stroke までの慢性期脳虚血症例23例で全例，患側の内頸動脈あるいは中大脳動脈水平部に高度の狭窄または閉塞を認めた。安静時の mCBF 及び中大脳動脈